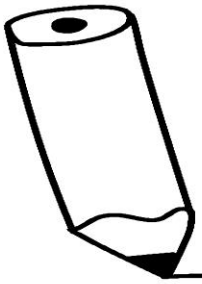
鳴門教育大学 生徒指導支援センター 教材リーフレット

2019（平成 31）年３月１日作成



「いじめとどう向き合うか」
傍観者の心の変容を通して

～ ＤＶＤ『青い鳥』（原作：重松清）を題材に ～

◆ 本教材は、国立大学法人鳴門教育大学「いじめ防止支援機構」の客員研究員、達谷健治が開発したものです。

◆ ＤＶＤ「青い鳥」の原作は、2007 年に刊行された重松清さんの同名小説です。

◆ 市販されているＤＶＤにおいては、家庭内鑑賞以外の使用、及び無断で複製・上映・放送・有線放送・インターネットでの利用、公衆への譲渡または貸与、改変等を行うことは法律により固く禁じられています。

◆ なお、本教材をご活用いただいた際は、簡単で結構ですので、お気づきの点や児童生徒の皆さんのようすについて、メール等でご連絡いただけるとありがたいです。よろしくお願いいたします。

≪ 本教材に関するお問い合わせ先 ≫

鳴門教育大学 生徒指導支援センター　竹口 佳昭
TEL：088-687-6381　FAX：088-687-6500
E-mail：ssgc-ctr@naruto-u.ac.jp
〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748
鳴門教育大学 生徒指導支援センター

「いじめとどう向き合うか」－傍観者の心の変容を通して－

＜教材＞　DVD「青い鳥」（発売元：株式会社バンダイナムコアーツ）

【 １．ねらい 】

いじめに対する傍観者の存在が「いじめを生みやすい環境」に関係していると言われることがある。また、教育再生会議は 2006（平成 18）年の『いじめ問題への緊急提言』で、「いじめを見て見ぬふりをする者も加害者である」と指摘している。しかし、その一方で、学校現場では、自分の身近に起きたいじめに対して、憤りを感じながらも何も為し得ず傍観するしかなかったことに自責の念を抱き、良心の呵責に耐え続けている児童・生徒の姿もある。

本教材は、「いじめとどう向き合うか」というテーマについて、ＤＶＤ「青い鳥」で描かれている傍観者的立場の生徒の葛藤・心の変容に焦点をあてて学習者に問いかけ、傍観の立場を越えていく道筋を考えさせることがねらいである。

また、合わせて、先生方には、本作品に登場する「村内先生」が、「園部くん」をはじめとする生徒たちの「開き直り」の裏にある苦悩を感じ取り、かたちだけの反省でいいのかと揺さぶりつつ、じっと見守り、生徒自身の気づき・変容・成長を支える姿を通して、いじめを傍観するしかない無力感・絶望感で苦悩している児童生徒にどうかかわるかを考える道しるべにしていただければ幸いである。

【 ２．あらすじ 】

ある中学校の２年１組で、学級で起きたいじめを苦に被害生徒（野口）が自殺未遂の末、転校してしまった。休職した担任の後任として臨時教師（村内）が赴任する。

学級の生徒たちは、村内先生との初対面の場でとまどう。先生が極度の吃音であったため、自己紹介で言葉が何度もつっかえたからだ。しかし、生徒たちは村内先生の対応にさらに動揺する。村内先生が野口の転校後に片付けられた机と椅子を学級の元の位置に戻させ、机に向かって「野口君、おかえり」と声をかけたからである。

その翌日からも毎朝、誰もいない机に向かって「野口君、おはよう」との村内先生からの言葉かけが続けられた。いじめグループの中心であった加害生徒（井上）は、自分たちへの罰ゲームかと苛立った。

井上たちは、両親がコンビニ店を営む野口に「コンビニくん」とのあだ名をつけて呼んでいた。しかし、それは家がコンビニ店であったからではなく、何でも言うことを聞いてくれて自分たちにとって便利な存在であったからだ。学級の生徒は井上のグループを中心に、野口に対して店の品物を持ってくるよう強要した。そして、日常的な万引きの要求は次第にエスカレートしていった。どんな要求に対しても笑いながらおどけて応える野口であったが、遂に耐えきれなくなり、

加害者名を遺書に遺して自殺を図る。幸い未遂に終わるが、野口はそのまま転校していった。遺書は、野口の親の意向で、加害者名として３人の名前が記されたと思われる箇所を黒塗りにしてマスコミに公表された。そのうちの２人は、井上と、もうひとつ別のいじめグループの中心的存在であった生徒（梅田）の名前だと噂されるようになったが、残りの１人は不明であった。

そんな中で、野口が転校していった後もずっと心の中で葛藤を続けていた傍観者的存在（園部）がいた。園部は学級の総務委員を務め、野口へのいじめ事件後、生徒会の取組として行われた「ベストフレンズ運動」に関わっていた。運動の一環として、生徒たちの悩みの声を聞く目的で、投書箱「青い鳥 BOX」が校内に設置されていた。ある日、生徒会担当教師立ち会いの場で開封された一通の投書に書かれていた、「誰かを嫌うのもいじめになるんですか？」に園部はこだわり、担当教師に同じ問いを投げかける。担当教師は正論（建前論）を返すが、園部は納得できない。しかし、その場にいた村内先生からのいじめに対する思いの発言をきっかけに、園部は今まで自分の中で抱えていた心の葛藤を、村内先生と二人だけになった教室でぶつける。

園部のぶつける疑問に、とつとつと、しかし本気で大切な思いを語る村内先生に、園部は次第に心を開き、野口が遺書に一番に書いたのは自分の名前に違いないと涙ながらに話す。園部は自分も一度だけ友だちにけしかけられて、野口に物を要求したことがあり、自分が犯してしまった過ちをずっと悔いていたのである。野口の転校後、園部は自分の行為を顧みる中で、本当は野口が自分に助けを求めていたのに、みんなと一緒の行動をとったことで、とりかえしのつかないことをしてしまったとの自責の念にかられていた。

村内先生は、クラスのみんながやったことへの責任を厳しく説きながらも、そんな園部の思いを受け止め、今の気持ちや心の中で繰り返してきたことを忘れるなと、温かく支える。

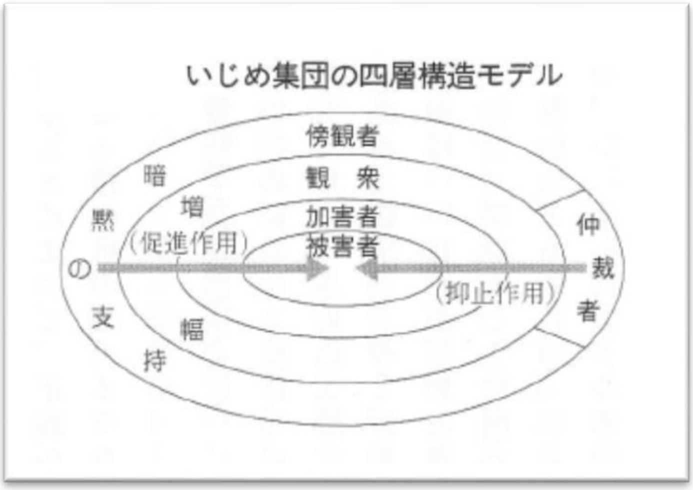
後日、野口の遺書に書かれていた３人目の名前が「その他みんな」であったということを園部は耳にするが、それでもやはり野口が救いを求めていたのは自分であり、自分の過ちと野口の思いをずっと忘れないと心に誓う。

【 ３．解説 】

（１）いじめを見えにくくするもの

いじめの事実は、本人からの訴えがなく、また周囲も気づかないまま、発覚せずに重大事態に至るケースが少なくない。それには様々な要因が考えられるが、まず、被害者側の要因として次の視点に留意したい。

いじめの被害者は、「家族に心配をかけたくない」「周囲に相談することによって一層悪化するかもしれない」と考えて、いじめられていることを誰にも言えず、自分で抱え込んでしまうことがある。また、自分でいじめを認めることは　自尊心が許さない、或いは自分にもいじめられる原因があるからしかたないと甘受してしまうこともあると指摘されている。さらに、仲間から孤立することへの不安から、あえて自分の立場に甘んじてしまうことも考えられる。「いじめと仲間関係」について、阿形*[1]は、児童期・青年期の子どもたちにとって仲間は、乳幼児期の子どもにとってのお母さん的な存在に相当する安心基地であり、いじめによってクラスなどの集団から一人だけ仲間はずれにされることは、依存できる安心基地を喪失することであると述べている。



本作品の被害者、野口は、級友からのどんな無理難題に対しても、笑っておどけてみせながら万引きの要求に応じていった。いじめから目を背け、あえて自分でいじられキャラに甘んじてでも、学級の仲間とつながっていたかったのかもしれない。

一方、被害者である野口のそんな態度が、加害者である井上の罪悪感を薄め、いじめを正当化することにつながっている。井上が、自分たちは本当にいじめていたんだろうかと、当時を振り返りながら、級友に次のように語る場面がある。「あいつ、いつも笑ってたじゃないか。難しいことを命令すればするほど、『ひぇー、かんべんしてくださいよ。』とか言って、笑ってもらいたがっていただろう。」と、いじめを否定し、むしろ相手の気持ちに応え、いじってやったんだと自身の行為を肯定している。

いじめは、一見、関係が成立しているように見えるグループの仲間内で発生していることが、様々な調査研究から明らかにされているが、上記のような視点から、周囲にいじめの存在を見えにくくしていることに留意する必要がある。

＊1 阿形恒秀（2018）「我が子のいじめに親としてどうかかわるか」ジアース教育新社

（２）傍観者の葛藤

いじめの四層構造（加害者・被害者・観衆・傍観者）を提唱する森田＊[2] は、いじめ被害の多さは、学級内の加害者や観衆の人数よりも、傍観者の人数と最も高い相関を示していると指摘している。さらに、これらの４つの立場は固定化されたものではなく、たとえば被害者と加害者が入れ替わることもよくあると述べている。

傍観者の視点に立って傍観の意味を考えるためには、その内にある心の葛藤に十分留意する必要がある。いじめを見て見ぬふりをして、いじめに立ち向かわない傍観者の姿勢はしばしば非難されるが、実際に心ならずも傍観者になってしまった児童生徒の中には、いじめを見ても何とも思わない者もいるかもしれないが、一方で、目の前のいじめに憤りを感じながらも、いじめを批判すると自分が加害の対象となるかもしれないという周囲の雰囲気に同調して傍観することしかできず、いじめを止めることのできなかった自身への良心の呵責に耐え続けている者がいることも事実である。

本作品は、いじめの傍観者的立場であった園部の心の葛藤を通してストーリーが展開される。園部は、最初は、被害者である野口の笑いやおどける姿を疎ましく思い、そうすることしか自分の居場所を見いだせなかった野口の本当の心の内の苦しみや助けを求める叫びに気づいていなかった。無理な要求をされても断らず、本気で自分の気持ちを伝えないで、笑ってごまかすような態度に園部は違和感を覚え、受け入れられなかったのだろう。しかし、自殺未遂の出来事が起きるまでは、救いを求めていた野口の苦しみに気づくことができず、それどころか、自分もいじめに加担する形になってしまったことを、園部は後悔し、心の中でずっと葛藤を続けていた。

自身の犯してしまった過ちにずっと、もやもやした気持ちを抱えていたため、「誰かを嫌うの

もいじめになるんですか？」という疑問にこだわったのかもしれない。自分の中で抱えていた葛藤をぶつける園部に、村内先生は自身の吃音を引き合いに出しながら、「いろんな人がいるんだ。先生みたいに言葉つっかえないとしゃべれない人もいるし、野口君みたいに冗談っぽく言わないと本気でしゃべれない人もいる。」と語る。

周囲とのちょっとした違いや異質性が排除意識につながり、いじめの要因となることが少なくないが、村内先生の存在は、この視点から一つの大きな問題提起をしていることにも留意したい。

＊2 森田洋司（2010）「いじめとは何か」中公新書

（３）教師の見守り、成長支援

野口の転校後、自身の過ちに気づき、良心の呵責に耐えながらも、どう行動していいかわからなかった園部の気持ちを、教師として受け止めて、ずっと寄り添いながら心の変容を促し、成長を支えたのは、臨時教師として赴任した村内先生である。

クラスの生徒たちに、自分たちが野口に対してやったことを決して忘れてはいけないと責任の重さを厳しく問いながらも、生徒たちの成長を信じ温かく見守る村内先生の姿が、園部の心を動かした。事件後、学校の取組として行われた形式的な反省文や生徒会の運動、教師の建前論に納得できなかった園部には、生徒と本気で向き合う村内先生の姿が大きく心に響いた。叱責や説得の言葉ではなく、寄り添い、見守る姿勢である。

「見守ること」について、河合＊[3] は、見守るというのは責任を育てるいちばんいい方法であり、教えるより何倍もエネルギーが要ることだと述べている。子どもは自責の念を持ったり、考えたり、反省したりしているもので、責任体験をして成長していく、それを見守ることの大切さと難しさを河合は論じているのである。いじめについて考えるとき、善悪論や価値観の押しつけでなく、子どもたちの成長支援のため、生徒の心を揺さぶるような問いかけ・働きかけを行いながら、寄り添い、見守る姿勢を大切にしたいものである。

＊3 河合隼雄（2009）「いじめと不登校」

【 ４．指導例 】

事前指導 … DVD を視聴し、ワークシートに各自で記入させておく。

（展開例）

	学習活動と発問	指導上の留意点
導入	○ あらすじを確認し、ポイントを整理する	・園部の心の変化に焦点をあてさせる。
展開	１～５について考えを発表する。 １．野口が級友たちからどんな無理な要求をされても、いつも笑っていたのはなぜか。 ２．友だちにけしかけられて野口に物を頼んだときの園部はどんな気持ちだったか。 ３．園部が野口の遺書に書かれた名前の一つが自分のだと思ったのはなぜか。 ４．村内先生が転校した野口の机を教室に戻したのには、どのような思いがあったのか。 ５．村内先生が言う「責任」とはどういう意味か。	※ 様々な考えをできるだけ多く引き出し、意見交換をさせる。 ・心の内の苦しみや助けを求める叫びに気づかせたい。 ・最初はあまり罪の意識がなかったことを捉えさせる。 ・自分に救いを求めていたことに気づいたことに着目させる。 ・表面的な反省だけで終わらせては解決にならないことを伝えたかったことを汲み取らせる。 ・気持ちを踏みにじられた仲間の痛みや苦しみを受け止め、いじめと向き合うことの大切さに気づかせたい。
まとめ	○ 自分の身の周りにいじめが起きたとき、どのように行動したいかを各自まとめる	・子どもたちの本音を大切に、葛藤や悩みも受け止めたい。

【ワークシート】

ＤＶＤ「青い鳥」を見て思ったこと

＿＿年＿＿組＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．野口くんが、級友たちからどんな無理な要求をされても、いつも笑っていたのはどうしてだと思いますか。

２．園部くんが、友だちにけしかけられて一度だけ野口くんに物を頼んだとき、どんな気持ちだったと思いますか。

３．園部くんが、野口くんの遺書に書かれた名前の一つが自分の名前だと思ったのはどうしてだと思いますか。

４．村内先生が、転校した野口くんの机を教室に戻したのは、どのような思いがあったからだと思いますか。

５．村内先生が言う「責任」とはどういうことだと思いますか。

６．あなたが園部くんの立場なら、今の野口くんにどのような言葉をかけたいと思いますか。